

現代大学生における友人関係への態度に関する研究

—友人関係に対する「無関心」に注目して—

中園 尚武 九州大学大学院人間環境学府
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

The research on the attitude to peer relationship in university student —Focusing on “the indifference” for the peer relationship—

Naotake Nakazono (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purposes of this research were to make the scale on peer relationship which added the viewpoint of the indifferent attitude for the peer relationship and to examine features of peer relationship in university students. 248 university students (male166 ,female82) were given a questionnaire. The scale which consisted of 4 factors of "real intention and closer relation", "fear of estimation and interest", "widely and pleasantly" and "egocentric" was made. As a result of classifying the subject by the scale, "the indifference group" which avoided closer peer relationship and did not mind the estimation from their friend and was egocentric was confirmed. And the reason for the attitude to peer relationship was examined from the description. It was considered that they would not have the interest for the peer relationship for their safety and stabilization.

Keywords: peer relationship, indifference, egocentric

1. 問題と目的

青年期は、心理的離乳と言われる親離れが進む時期であり、その代償として友人との関わりを求めるとされている。また、青年期は自分自身に対する関心が高まるとともに、同一視をもたらすような深い友人関係をもつことを通して、新たな自己概念を獲得していく時期であるともされている。そういった時期にあつて、青年期における友人関係は他の年代以上に重要であると考えられる。

しかし近年、青年の友人関係の特質として、内面的な関わりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向が指摘されている。橋本（1997）は、女子学生に対する面接調査から、現代青年の対人関係に関するストレスの原因は、直接的な衝突によるものよりも良好な関係を維持するためのコストや、それがうまくできない劣等感が中心となっているとしている。また、岡田（1995）は、大学生の友人関係には、集団で表面的なおもしろさを志向する「群れ関係群」、友人に気を遣いながら関わる「気遣い関係群」、深い関わりを避ける「関係回避群」があることを見出し、関わりを避ける群と表面的な楽しさを求める群は異なるタイプであることを示している。これらの研究の多くは、友人から嫌われないように気を遣い、自分を出せずに気疲れしていることを指摘している。

しかし一方では、他者への配慮の欠如や他者への関心の無さについての指摘もなされている。岸（1989）は、現代青年の特徴として、内集団での閉鎖的平和主義、そして関わりのない他者への配慮の欠如をあげている。実証的なデータに基づいた研究として、中園（2000）は、大学生の友人関係について調査を行い、友人に対して気遣いしない群を見出し、自分さえよければ人のことなどどうでもいいという他者への関心がない群の存在を示唆したが、本音でつきあっているから気遣いをしないという可能性も残された。また、橋本（2000）は、大学生を対象にした調査を行い、内省傾向が低く友達への気遣いが低い「無関心群」を見出し、対人ストレスをあまり感じておらず、精神的健康度が高いことを報告している。

以上のように、現代青年における友人関係の希薄化傾向の指摘に続いて、友人への配慮の欠如や他者の目を気にしない傾向、あるいは関係をもとうという意欲の低さなど、友人関係に対する無関心と言えるような傾向が指摘され始めている。しかしながら、こういった友人関係への無関心についての実証的研究は少なく、また、このような視点を含めた友人関係に関する尺度も見あたらないため、実証的研究においては、前述した中園（2000）や橋本（2000）のように友人に対して気遣いをしないという側面からの指摘にとどまっている。そのため、友人

への配慮の欠如だけではなく、現代青年の特徴として指摘されている友人からの評価を気にするのかどうかや友人のことをもっと知りたいかどうかなどの視点を加え、無関心についてより具体的にとらえることができるような友人関係に対する態度に関する尺度を作成する必要があると考えられる。そこで本研究では、今までは十分に扱われてこなかった、友人関係への無関心についての視点を加えた質問紙を作成することを第1の目的とする。さらに、作成された尺度を用いて、友人関係に対して関心がないと思われるような特徴を示す青年が抽出されるのかどうかを検証することを第2の目的とする。また、そのような態度で友人に関わる理由について検討を加え、そういった友人関係をとらざるを得ない現代大学生の心理的背景についても検討を試みる。なお、対象については、無関心に関する指摘が多くなされている大学生を対象とする。

II. 第1研究

1. 目的

現代の大学生が友人とどのように関わっているのかを把握するために、先行研究では十分に扱われてこなかった、友人関係への無関心についての視点を加えた質問紙を作成する。

2. 方法

1) 調査対象と調査時期

九州内のA国立大学・B私立大学において調査を行い、回答に不備のなかった248名(男性166名、女性82名)を分析の対象とした。平均年齢は、男性19.3歳(SD=1.2)、女性19.3歳(SD=1.3)であった。

調査時期は、2000年7月～10月であった。

授業中に配布して持ち帰ってもらい、一週間後に提出とした。

2) 質問紙の内容

(1) 友人関係への態度に関する項目

予備調査を行い項目の作成を行った。また、先行研究を参考にして項目の収集を行い、40項目を本調査で用いた。以下に、項目を収集するために参考にした尺度について簡単に説明を行う。

岡田(1995)の友人関係尺度は、「気遣い因子」、「ふれあい回避因子」、「群れ因子」の3因子から成っている。中園(2000)においてはこの尺度が用いられ、「気遣い因子」の得点が極端に低い群が見出され、友人関係に対して無関心な群である可能性が示唆されている。

長沼・落合(1999)の尺度は、青年期にみられるつきあい方をできるだけ多く析出することを目的として作成

された尺度であり、136項目、16因子からなる。

斉藤・中村(1987)の尺度は、対人的志向性に関する尺度であり、「人間関係志向性」、「対人的関心・反応性」、「個人主義的傾向」の3つの因子から成っている。

また、予備調査において、「『友人』といってもたくさんいて答えにくい」という意見が多く見られた。また、「友人」という言葉は、かなり親しい人を想起させることが確認できたため、本調査では「最も親しい同性の友人を一人」想定してから、回答を求めることにした。

「全くあてはまらない」から、「とてもあてはまる」までの6件法で回答を求めた。

(2) 自由記述

自由記述は、想定した友人とどのような行動をするのかを問うものである。本調査では「最も親しい同性の友人を一人」という限定を加えたが、これは被検者の評価によっている。そのため、「最も親しい同性の友人」との行動的側面についての回答を求めることで、想定した友人との親しさの水準に被験者間で大きな違いがないかを調べるために、この質問が設けられた。

3. 結果

1) 「最も親しい友人」との行動について

「最も親しい友人」との行動については、「一緒に買い物に行く」、「一緒に食事をする」、「一緒に遊びに行く」などのように、『友人と一緒に行動する』という回答が圧倒的に多数を占めており、「最も親しい友人」という教示によって想定される友人との関係に大きな差はないと考えられた。

2) 友人関係への態度に関する尺度の因子分析

まず、天井効果、フロア効果のみられた3項目を除外した。

次に、残った37項目に対して男女込みで、因子分析{主成分分析法、直接オブリミン回転(コーティミン基準)}を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から4因子が適当であると判断された。そこで、因子負荷量が.35以上であることを基準とし、各因子に十分な負荷量を示さない6項目を除外して、残りの31項目に対し再度因子分析を行った。31項目による全分散のうち回転前の4因子によって説明できる割合は42.9%であった。Table 1に直接オブリミン回転後の因子パターンと因子間相関を示す。

また、男女別でも因子分析を行った結果、ほぼ同様の因子パターンが得られた。そのため、この4因子は男女に共通するものと判断された。

第1因子は、友人と本音で関わろうとしている内容や、友人と多少ぶつかっても関係を深めようとする内容を表す項目からなると考えられた。よって、第1因子は「本

Table 1
友人関係への態度に関する尺度の因子分析結果（オブリミン回転後の因子パターン）

項 目	F1	F2	F3	F4	h ²
友人には自分の内面を話さないようにしている	-.745	-.088	.089	-.070	.567
友人にありのままの自分は出たくない	-.726	.051	-.003	-.138	.528
友人とは何でも本音で話し合うようにしている	.621	.117	-.099	-.054	.419
友人と深く関わりたくない	-.599	-.083	-.212	-.051	.417
友人には心を開いてつきあった方がいい	.571	.283	.145	-.209	.549
友人から個人的な話をもちかけられるのはわずらわしいものだ	-.534	.114	.009	.383	.467
友人とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合う方がいい	.533	.004	.112	-.049	.307
友人の言うことに口をはさまない方がいい	-.526	-.036	.117	.023	.293
友人に自分の弱さや欠点を隠す必要はない	.521	.016	.108	.122	.285
友人と真面目な話はしたくない	-.515	.098	.067	.406	.465
友人とぶつかり合うのは避けたい	-.498	.298	.268	-.145	.451
自分にとって友人関係はわずらわしいものである	-.486	.202	-.198	.255	.383
友人からの批判が気になる	-.088	.696	.035	-.167	.554
友人からどう見られているか気になる	-.091	.587	.156	-.230	.499
友人の行動の動機を知ることに関心がある	.000	.580	-.142	.075	.323
友人のことについて、なるべく色々なことを知りたい	.354	.563	.080	-.037	.494
友人に嫌われないようにしている	-.187	.545	.291	-.127	.504
友人にハテえたくない	-.186	-.526	.122	-.212	.326
友人と一緒にいたいと思う	.421	.511	.107	.038	.483
友人に自分のことをわかってもらいたいとは思わない	-.397	-.430	-.082	-.044	.371
一人の友人と特別親しくするよりはいろんな人と仲良くしたい	.118	-.255	.815	.082	.658
一人の友人と深くつきあうより、たくさんの人とつきあうようにしている	.043	-.189	.814	.223	.654
友人といるときに場を盛り上げることは大切だ	.008	.244	.538	-.130	.442
冗談を言って友人を笑わせるようにしている	.112	.151	.450	-.059	.279
楽しい雰囲気になるよう気をつけている	-.205	.277	.424	-.145	.377
自分のために友人を傷つけることがあっても仕方がないと思う	-.057	.146	.057	.573	.335
友人を傷つけないよう気をつかうことは大切だ	-.181	.338	.172	-.566	.567
友人の考えていることに気をつかうことは大切だ	-.160	.202	-.078	-.517	.331
役に立たない友人はいらない	-.205	.238	.036	.506	.339
友人との約束は決して破ってはいけない	-.071	.066	.132	-.440	.239
友人が本当はどんな人物であるかに関心がない	-.364	-.165	.173	.435	.402
寄与率(%)	17.8	12.7	6.5	6.0	42.9
因子間相関	F1	F2	F3		
	F2	.045			
	F3	.001	.185		
	F4	-.096	-.128	-.129	

音・関係深化」因子と命名された。

第2因子は、友人の評価が気になることに関する内容や、友人についてもっと知りたいという気持ちや理解されたいという気持ちを反映している内容と考えられた。

そこで、第2因子は「評価懸念・関心」因子と命名された。

第3因子は、いろいろな人と広く接したいという思いを反映していると考えられる項目と、楽しくなるように

意識していることを示す項目からなっていると解釈された。よって、この因子は「広く・楽しく」因子と命名された。

第4因子は、友人を傷つけることに対しての意識が希薄で、自分の都合で友人と接している内容を表していると考えられた。よって、第4因子は、「自己中心的」因子と命名された。

Cronbach の α 係数は、第1因子で.83、第2因子で.76、第3因子で.67、第4因子で.56であった。

4. 考 察

「本音・関係深化」因子に関しては、本当の自分の姿を知ってもらい、友人との関係を深めようとすることを表していると思われる。落合・佐藤(1996)は青年期における友人関係を調査し、「広いー狭い」という「自分が関わろうとする範囲の次元」と「深いー浅い」という「人との関わり方に関する次元」の2軸を見出しており、本研究での「本音・関係深化」因子は、友人との関係の深さに関連する項目の集まりであると言えるだろう。また、この因子に含まれる項目に対する対象者全体の平均値は高く(逆転項目では低く)、多くの大学生は友人と本音で関わり、関係を深めたいと思っているのではないかと考えられる。

「評価懸念・関心」因子については、斉藤・中村(1987)の対人的志向性尺度における「対人的関心・反応性」因子を参考にして用いた項目が多く含まれている。斉藤・中村(1987)において、「対人的関心・反応性」因子は、相互依存関係の対人的側面に対して敏感かどうかという対人的志向性をもっとも反映する因子であると考えられている。本研究では、予備調査をふまえ、これらの項目を友人関係への無関心さに関する項目と予想して用いたが、友人の目を気にしたり、友人と関わりたいという意味から見た因子として抽出されたようである。友人を傷つけることに対して注意を払わないという「自己中心的」因子が別に抽出されていることを考えると、友人関係への無関心さを反映することとして本研究で考えていた、友人からの評価を意に介さないことと友人への配慮の欠如は異なるものであるということを示していると考えられる。

「広く・楽しく」因子は、近年、青年における友人関係の特徴として指摘されている、浅く・広いつきあい方(落合・佐藤, 1996)や、集団で表面的な面白さを志向する傾向(岡田, 1995)を反映しているものと考えられ、現代青年の大きな特徴の一つであることが確認されたと考えよう。

「自己中心的」因子に関しては、友人を傷つけることに対して気遣いせず、「モノ的」とも言える関係を表す因子であると言えるだろう。先述したように、本研究で

考えていた「無関心」の反映としての「配慮の欠如」と「他者の目を気にしない」ことの前者を表している因子と思われる。また、この因子には、岡田(1995)の尺度における、「気遣い」因子を参考にして用いた項目が逆転項目として多く含まれている。中園(2000)は、岡田(1995)の尺度を用いて、友人に対して気遣いをしない群を見出したが、この群が本音でつきあっているから気遣いをしないているのか、それとも自己中心的な関わり方をしているのかを特定できなかった。しかしながら、本研究で作成された尺度を用いると、「自己中心的」因子と「本音・深化回避」因子に対する反応によって、友人に対して気遣いをしない人たちが、本音で接しているから気遣いをしないのか、ただ単に他者への配慮が欠如しているから気遣いしないのかという特徴を識別できるのではないと思われる。

尺度の信頼性については、「自己中心的」因子で Cronbach の α 係数が.56であり、この因子においては、内的一貫性が十分とは言えない結果であった。今後、尺度の精度を上げるために検討する余地があるだろう。

III. 第2研究

1. 目 的

第1研究で作成された友人関係への態度に関する尺度を用いて、現代大学生の友人関係の特徴を把握する。特に、友人関係に対して無関心な態度をとる大学生が抽出されるのかを検証する。また、そのような友人との関わり方をするにいたった理由についても探索的に検討する。

2. 方 法

1) 調査対象と調査時期

調査対象と調査時期は、第1研究に同じである。

2) 質問紙の内容

(1) 友人関係への態度に関する尺度

第1研究で作成された、友人関係への態度に関する尺度を用いた。

(2) 自由記述

①友人とのつきあいにおいて心がけていることを問うもの、②心がけるようになった理由やきっかけについて問うもの(心がけることがない人はその理由について問うもの)の2問である。

①の質問は、友人関係への態度に関する尺度の結果から類型化するにあたって、その群の特徴を質的にも検討するために設けられた。②の質問は、現代の大学生が友人づきあいにおいて何かを心がける背景について探索的に検討するために設けられた。

3. 結 果

1) 友人関係への態度に関する尺度によるクラスター分析

現代の大学生の友人関係にはどのような特徴があるのかを調べるために、作成された友人関係への態度に関する尺度を用いて、対象者を分類することを試みた。

友人関係への態度に関する尺度において、各因子の項目得点を合計し、標準化したものを因子得点とした。その因子得点を変量とした Ward 法によるクラスター分析を行い、クラスターの解釈の明瞭さを考慮し、5つのクラスターを抽出した。5つのクラスターにおける各因子

得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示し、それをグラフにしたものを Fig.1 に示す。

次に、各クラスターの特徴を明らかにするために、友人関係への態度に関する尺度の因子得点の差を、一元配置の分散分析によりクラスター間で比較した。その結果、「本音・関係深化」因子においては、 $F(4,243)=69.12$ ($p<.001$) で群の効果が有意であった。多重比較 (Tukey の HSD 法) の結果、第4クラスターおよび第5クラスターは他の3群よりも有意に得点が高く、また、第2クラスターは第1クラスターおよび第3クラスターよりも有意に得点が高かった。「評価懸念・関心」因子におい

Table 2
5つのクラスターにおける友人関係への態度に関する尺度の因子得点

クラスター	1	2	3	4	5
N	31	62	39	96	20
本音・関係深化	-1.182 ^a (.705)	-.093 ^{ab} (.715)	-.935 ^a (.530)	.695 ^{ab} (.740)	.595 ^{ab} (.594)
評価懸念・関心	-.948 ^a (1.037)	-.641 ^a (.744)	.695 ^a (.663)	.349 ^a (.862)	.390 ^a (.586)
広く・楽しく	-.556 ^a (.687)	-.754 ^a (.909)	.506 ^a (.775)	.331 ^a (.918)	.624 ^a (.581)
自己中心的	1.236 ^{ab} (.815)	-.056 ^{ab} (.609)	-.084 ^{ab} (.573)	-.622 ^a (.748)	1.434 ^{ab} (.786)

同じアルファベットの小文字がある群と大文字のある群の間で、5%水準で有意差があることを示す。
() 内は標準偏差。

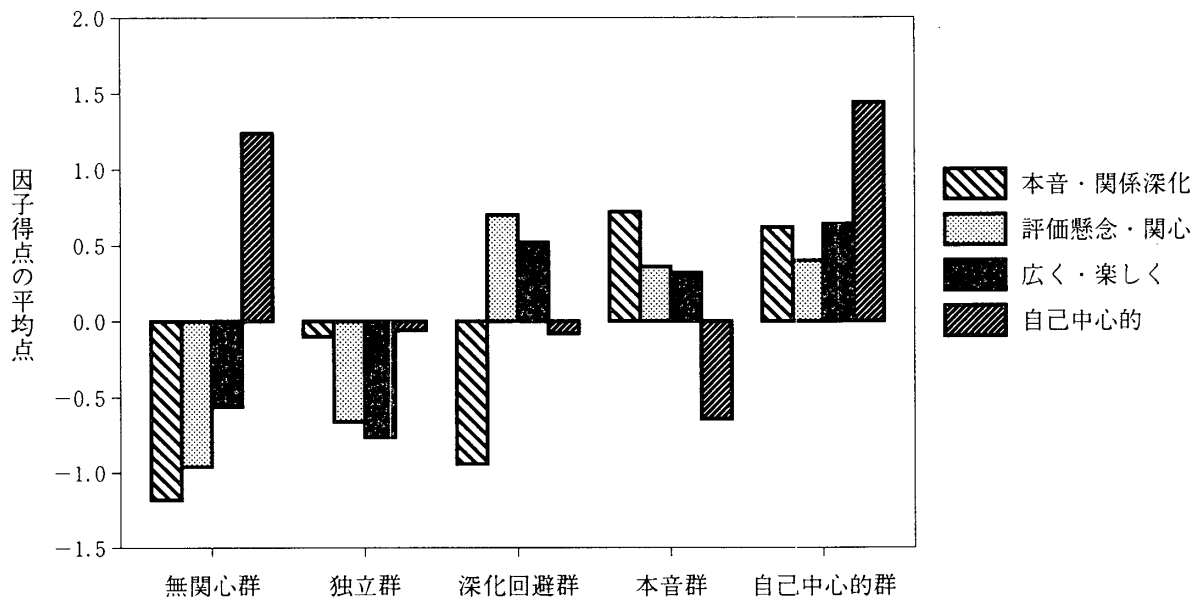


Fig.1 5つの群における友人関係への態度に関する尺度の因子得点

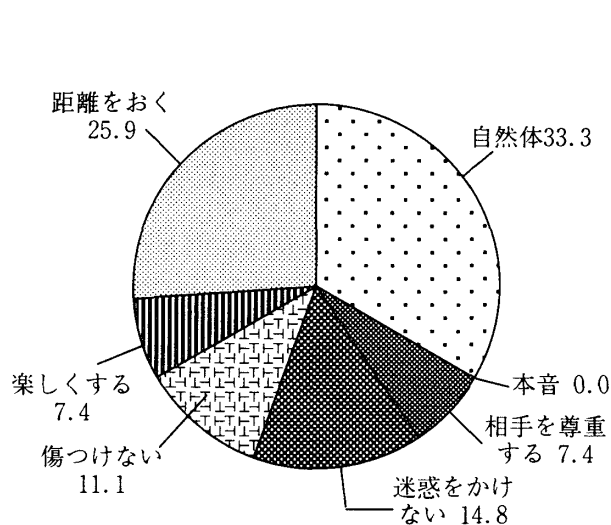


Fig.2-1 無関心群におけるKJ法結果

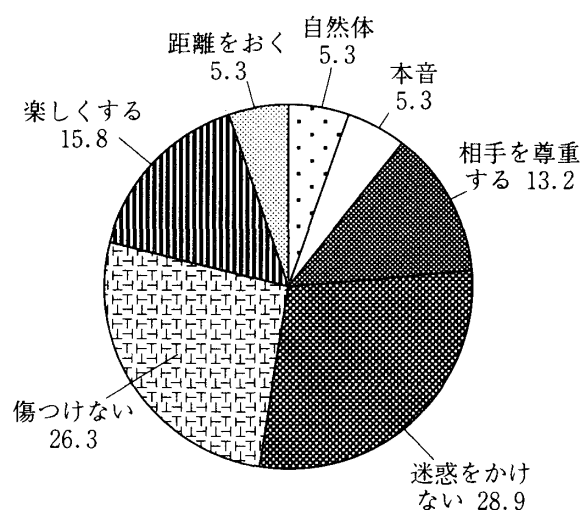


Fig.2-3 深化回避群におけるKJ法結果

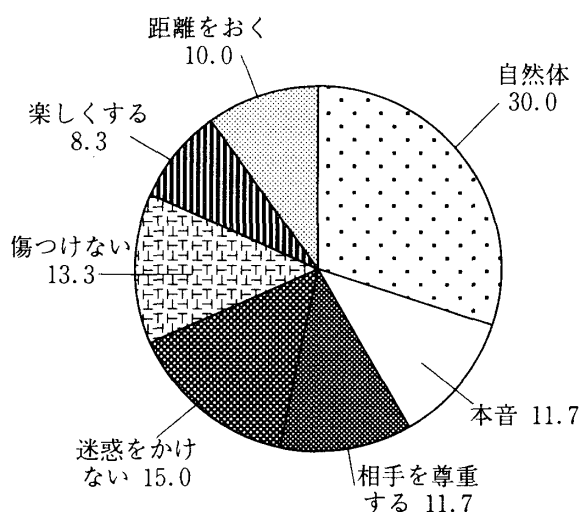


Fig.2-2 独立群におけるKJ法結果

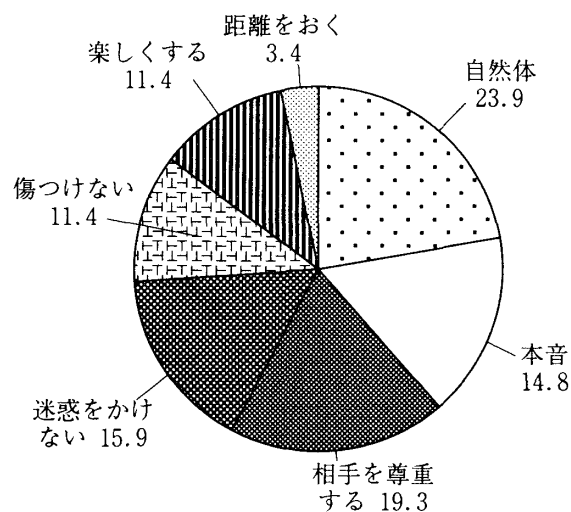


Fig.2-4 本音群におけるKJ法結果

では、 $F(4,243)=32.98$ ($p<.001$) で群の効果が有意であり、多重比較の結果、第1クラスターおよび第2クラスターが他の3つのクラスターよりも有意に得点が低かった。「広く・楽しく」因子においては、 $F(4,243)=25.54$ ($p<.001$) で群の要因が有意であり、多重比較の結果、「評価懸念・関心」因子と同様に、第1クラスターおよび第2クラスターが他の3つのクラスターに比較して、有意に得点が低かった。「自己中心的」因子においては、 $F(4,243)=63.73$ ($p<.001$) で群の効果が有意であり、多重比較の結果、第1クラスターおよび第5クラスターは他の3群よりも有意に得点が高く、また、第2クラスターと第3クラスターは第4クラスターよりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、第1クラスターは、「本音・関係深

化」因子、「評価懸念・関心」因子、「広く・楽しく」因子がともに低く、「自己中心的」因子が高い。よって、第1クラスターは友人との関わりについての意識が全体的に希薄であると思われ、「無関心群」と命名された。

第2クラスターは、「本音・関係深化」因子と「自己中心的」因子の得点は、ほぼ平均的であるが、「評価懸念・関心」因子と「広く・楽しく」因子が低いという特徴がある。これらのことから考えると、この群は自分なり価値観をもって周りに左右されないという特徴をもっていると思われ、「独立群」と命名された。

第3クラスターは、他のクラスターと比較して、「本音・関係深化」因子の得点が低いことが特徴である。よって、第3クラスターは「深化回避群」と命名された。

第4クラスターは、「本音・関係深化」因子が高く、

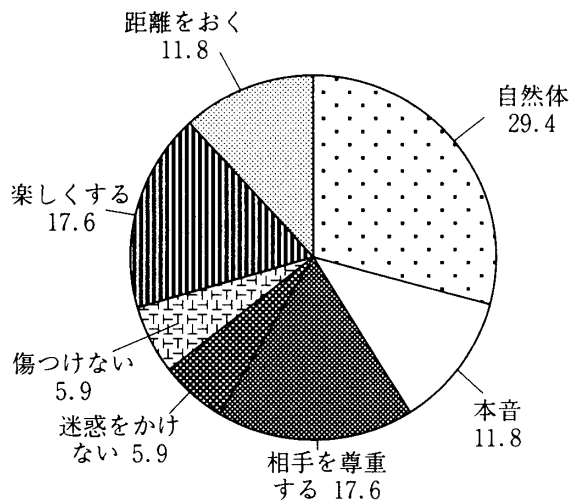


Fig.2-5 自己中心群におけるKJ法結果

また、「自己中心的」因子の得点は低い。よって、第4クラスターは「本音群」と命名された。

第5クラスターは、「本音・関係深化」因子が高いことは、第4クラスターと共通するところであるが、このクラスターは友人を傷つけることに対して注意を払わない傾向が顕著である。よって、第5クラスターは、「自己中心的群」と命名された。

各群における男女の度数について χ^2 検定を行ったところ、無関心群において男性の方が多いことが示された。

2) 自由記述

友人関係への態度に関する尺度の結果をもとにして5つの群に分けたが、その群の特徴をより明確に把握するため、友人とのつきあいにおいて心がけていることについて、自由記述による回答を求めた。その回答を、心理学を専攻する大学院生2名と筆者で、KJ法により分類した。

その結果、「自然体で接する」、「本音で接する」、「相手を尊重する」、「相手に迷惑をかけない」、「相手を傷つけない」、「楽しくなるようにする」、「相手と距離を置く」、「その他」の8つのカテゴリーに分類された。群別に、「その他」を除く7つのカテゴリーにふりわけられた割合を円グラフによってFig.2-1～2-5に示す。

なお、度数の少ないセルが多かったため、統計的な処理は行わずに、割合から傾向を述べることにする。

4. 考察

1) 「無関心群」について

「無関心群」は、友人に対して本音で接せずに関係が深まるのを避け、友人からどう見られているのかが気にならず、場を盛り上げるようなこともしない。また、友

人を傷つけることに対しても注意を払わない傾向があり、友人関係への関心が全般的に低い群であると言えよう。橋本（2000）は、他者に気遣いをせず、内省傾向が低い群を見出し「無関心群」と命名しているが、本研究における「無関心群」と対応しているとは一概には言い難い。橋本（2000）における「無関心群」は、深い関係を避けるような傾向は特に見られていないことも本研究の結果とは異なる部分であり、関係の深まりを避けず気遣いをしないという特徴は、むしろ本研究における「自己中心的群」に近いと思われる。また、上野ら（1994）の研究にみられる友人と心理的距離を大きくとり同調性が高い表面群は、他者の目を気にして行動上は優等生的であるとされ、小塩（1998）は、友人との浅いつきあい方と評価過敏が関連していることを報告している。これらの研究は、関係の深まりを避けることと友人からの評価に気にすることが関連していることを示していると考えられるが、本研究における「無関心群」は、友人関係の深まりを避けると同時に評価懸念が低いという特徴があり、今までの報告ではあまりみることがなかった交友関係のタイプだと思われる。本音を出さないことや関係の深まりを避けることが評価懸念によるものではないことは、自分を安定させるために、他者に期待せず最初から人との接触を断っていることの現れかもしれない。友人づきあいで心がけることがない理由としての、「人に期待しない。一人でいるのが好き」という記述は、そのような対処について端的に述べていると考えられよう。また、久世ら（1987）は、現代青年の社会意識に関して、社会へのかかわりの希薄化および自分や自分の身の生活への興味・関心の増大を指摘しているが、そのような「自分の身の生活」に「最も親しい同性の友人」でさえも入らなくなっているのかもしれない。もしそうであるならば、自らの精神的安定や社会的スキルの学習などの役割を果たしている友人関係の経験が非常に乏しいことが考えられ、対人関係の発達上、懸念されるものであると言えよう。

しかし、自由記述をみると、「お互いにあまり深くまで立ち入りすぎると互いの悪い面までもが見えてきて嫌になるから」、「自分は弱く壊れそうになるから、相手が自分の領域に入ってこないように心がけている」などの記述があり、友人関係のなかで相手との距離をおき、自分の安定や領域を守ろうという対処として「無関心」が採用されたことも考えられる。単に関心がないというよりも、友人関係への気遣いで疲れ果てた結果、そのような関係の持ち方をするようになったとも考えられるだろう。

また、この群においてのみ男女の人数に性差がみられ、男性の方が多かった。友人関係については性差が認められることが指摘されており、落合・佐藤（1996）は、男

子の友人関係は、自分に自信を持ち、友人と自分とは異なる存在であることを認識したもので、女子の友人関係は、友人と理解し合い、共感し、共鳴しあうといったお互いがひとつになるようなことを望むものであること示している。本研究における「無関心群」は、友人からどう見られているか気にならず、関係の深まりを避けるなどの特徴があり、そのような友人関係への態度を示す女性が少ないことは、先の指摘をふまえると妥当なものであると思われる。

自由記述では、「自然体で接する」が33.3%、「相手と距離をおく」が25.9%と、ともに5つの群のなかで最も高い割合を示していることが特徴と思われる。「自然体で接する」理由としては、「自分のその時の考えでつきあっているから信念はない」、「何も心がけることなく、自然体でいればいいと思う」、「人に期待しない。一人でののが好き」などがみられた。この「自然体で接する」理由については、対照的と思われる「本音群」からもいくつか抜粋して比較したい。「友達がうち明けてくれるので、自分もそうしようと思うようになったから」、「よくわからないけど、そういうふうにはできない人とは親友じゃないと思うから」、「ありのままの自分を見せ合うのが友人関係だと思うので、そのようにしている」などが本音群にみられた理由である。「無関心群」の理由としては、自分の考えや自分の気の赴くままという答えが目立つのに対して、「本音群」の理由は、友人との相互作用について言及しており、自然な姿を見せ合うことで関係を深めようとしていると言えよう。同じ「自然体で接する」に分類されていても「無関心群」の理由は、自分を中心としていて他者との関係の意識が低い答え方になっていると言えるだろう。

また、「相手と距離をおく」理由としては、「お互いにあまり深くまで立ち入りすぎると互いの悪い面までもが見えてきて嫌になるから」、「自分が友人に対しても一定の間隔をとっておかないと友人関係がきついただけになってしまうので、友人にもある一定の距離をとるようにしています」、「自分の中で『友人とはいつかは離れてしまうものだから、そんなに深くつき合っても仕方ない』という考え方があるから」などがみられた。友人との間隔をとることや関係が深くならないようにすることで、自分のなかに嫌な気持ちが起こるのを避けたり、きつくないようにするなど、自分を守る手段として友人と距離をとっていると考えられる。

また、「本音で接する」に分類されたものは一人もないことも特徴といえよう。心がけていることが特になく自然体で接している割合は高いのに、ありのままの本音で関わろうとしているものはいないということからも、「無関心群」は、友人関係への意識が低いことが確かめられたと言えよう。

2)「独立群」について

「独立群」は、友人の評価を気にせず、また、交友関係の広さを求めたり場を楽しくしようとはしないという特徴があり、このことに関しては「無関心群」と同様である。しかし、「本音・関係深化」因子や「自己中心的」因子は平均的であり、「無関心群」と違って、関係の深まりを避けるのではなく、関係をもったうえで自己を確立しているのではないだろうか。ただ、「自分の感覚のみを頼りにして、人の目を気にするのはやめよう」(岩間, 1995)という方略を用いて、自らの安定を図っていることも考えられることも指摘しておくべきであろう。

自由記述では、「自然体で接する」が30.0%で若干高いようであるが、ほかの割合は平均に近い。「自然体で接する」理由としては、「無理をしてしかつきあえないような友人と一緒にいたところで、そんな余裕のない関係から得るものは何もないと思うから」、「無理に自分をいいように作り上げてつき合っていると、いつか無理が出るし疲れるし、自分にとっても相手にとっても良くないと思うから」、「自然体でいられる友しかいないから」などがみられた。「無関心群」と比べて、関係の深まりを避けるのではなく、独立した一人の人間同士として交流し、それでうまくいかないならば、別れることも辞さないという姿勢があると言えるのではないか。

3)「深化回避群」について

「深化回避群」は、友人との本音でのつきあいを避ける傾向が最も強いことが特徴である。また、友人からの評価を気にしたり、楽しくしようとする傾向も強く、現代の青年における友人関係の特徴として指摘されることが多い、自分の内面を開示することを避け、互いに傷つけたり傷つくことを恐れ、形だけの円滑な関係を求める傾向(岡田, 1995)と合致する結果であり、現代青年の特徴の一つを反映した群であろう。

自由記述の結果を見ると、「相手に迷惑をかけない」「相手を傷つけない」ように心がけている人が多く、「自然体で接する」人は少ないようである。心がけている理由としては、「友人に嫌われたくないから」、「嫌われたくない。いい関係でいたい」、「友人関係を長く、傷つかないものにするため。できるだけ多くの人と友人となることで安心感を持つため。大学で浮かないようにする」などがみられた。このことから考えると、好んで深い関係を避けているのではなく、友人に嫌われまいとするあまり、深い関係に踏み込まずに楽しくふるまっていると考えられる。また、友人関係に対する関心は非常に高いが、積極的に関わるのではなく、迷惑をかけないように傷つけないように、消極的受動的に関わりを求めていると思われる。

4)「本音群」について

「本音群」は、友人と深く関わったり本音で接したりしており、同時に、友人を傷つけることに対して注意を払っている群である。5つの群のなかで最も多い人数が含まれるのは「本音群」であり、友人関係の希薄化や関心のなさが現代青年全体に見られる特徴ではなく、多くの青年が友人と深い関係を築こうとしていることを表している結果だと思われる。

自由記述では、全体の割合と比較して、特に目立って多いところはないが、「本音で接する」や「相手を尊重する」割合は高めであり、「相手と距離をおく」割合は低くなっている。「本音で接する」理由としては、「それができるのが本当の友人だと思うから」、「上辺だけのつきあいではなく、深く友人のことが知りたいから」などの記述がみられ、深い友人関係を求めていることがわかる。「相手を尊重する」理由としては、「自分勝手、自己中心的な人間にならないように」、「私が悩んでいたとき、悲しんでいたとき、いつも明るく人が笑うようなことばかりいっている友人が、本当に真剣に私のことを考えてくれた経験があり、そのことがとても嬉しかったから」などがあり、お互いに配慮しあうような関係についての意識が高いと言えよう。

5)「自己中心的群」について

「自己中心的群」は、友人に対して自分を隠さず本音で関わるという特徴あり、これは「本音群」と共通するところである。また、友人関係の広さや楽しさを求める傾向も強いが、最も特徴的なのはこの群は友人を傷つけることに対して注意を払わないことである。以上の特徴から考えると、友人関係に対する関心はあるようだが、その接し方は一方的で自分の都合で関わる人が多いのではないと思われる。

自由記述では、「自然体で接する」割合が比較的高く、「相手に迷惑をかけない」「相手を傷つけない」ように心がけている割合は低かった。理由の記述では、自分を出すことに関する記述が目立った。例えば、「心がけていることがあると自分を出せなくなりそーだから」、「まず友人とのつきあいにおいては、自分が楽しまないと相手にも楽しいと思ってもらえないと思うので、私は好きな友達や仲良くなりたい人の前では自分をかざらずにありのままの自分であるようにしている」、「友人のことを知りたいし、自分のことを分かって欲しいから。話をしないと何も始まらないから」などがあつた。友人を傷つけることへの配慮が低いことも考えられるが、それよりも自由記述からは、遠慮なしに自分を出すことへの意欲の高さと楽しさへの関心が目立った。現代青年に関する記述でしばしば指摘される、群れて楽しさを求める群に近いと考えられる。また、大平（1995）の、現代の若者に

とって、人に親切にすることはかえって相手から悪意や偽善ととられ、やさしくない人間だとみなされるため、親切にしないことが「やさしさ」であるという感覚が常識となっているという指摘をふまえると、本研究での「自己中心的群」は、現代的な「本音」や「やさしさ」を示している群であるとも考えられる。

IV. 総合考察

本研究では、まず、他者への配慮欠如や人からどう見られているか気にしない傾向などのような現代青年の対人関係についての指摘をふまえ、その視点を取り入れた友人関係への態度に関する尺度を作成した。その尺度を用いて対象者を分類した結果、友人関係の深まりを避け、友人からの評価を気にせず、自己中心的な関わりをする傾向のある「無関心群」を見出し、本研究の目的であった、友人関係に対して関心がないと思われる群が存在することを明らかにした。この群は、上野ら（1994）や岡田（1993）などの研究で見出された群のように、他者からの評価を気にして友人関係の深まりを避けるのではなく、評価懸念が低くかつ関係の深化を避けるという点が従来の指摘と異なるものである。自分の興味や関心を重視し、他者との関わりを避けようとする現代青年の特徴が指摘されていたが、それが本研究により実証的に示すことができたと考えられよう。

また、現代青年の特徴として指摘されている他者への配慮の欠如が、一部の大学生に見られることが実証的に示された。中園（2000）や橋本（2000）において、友人に対して気遣いをしないという特徴をもつ群が抽出されていたが、本研究で作成された尺度を用いることにより、配慮が欠如している群を、さらに「無関心群」と「自己中心的群」の2群に分け、より詳しく検討できたと考えられるだろう。大平（1995）は、人に親切にしないことが現代的な「やさしさ」であると指摘しており、青年のなかでは比較的適応していることも考えられるため、今後検討していく必要があると思われる。

以上のように、本研究は、現代大学生における友人関係への態度に関して「無関心」という視点から考察を試みようとするものであった。松井（1990）は、青年期における友人関係の機能として、安定化の機能、社会的スキルの学習機能、モデル機能の3点をあげており、友人関係に対して関心が低く友人関係を結べないことは不適応の要因のひとつになるとも考えられている。そういった文脈から言えば、本研究は現代青年の友人関係に対して警鐘を鳴らすという意義があると言えよう。しかし、一方では、友人関係に対して関心をもたないことは現代社会の状況に対する一種の対処であることも指摘できる。自由記述からは、友人関係のなかで相手に期待せず、相

手と距離をおくことで、かろうじて自分の安定や領域を保とうとしている青年の姿が垣間見られた。今後も、従来の価値観からだけで判断するのではなく、現状の中にいる人たちが自身の声を聞くことで、理解を進めていく必要があるだろう。

今後の課題としては、尺度を改善し、因子の内的整合性を高めることや発達的な変化を検討することなどが考えられる。また、友人関係に対して無関心な態度をもつ青年について、面接調査や質問紙調査を行い、より詳しく特徴を把握していくことも必要である。その際は、価値観の変化や青年をとりまく状況の変化も考慮し、自己評価や適応状況などを検討することが必要と思われる。

<付 記>

本研究は、九州大学大学院人間環境学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものです。ご指導下さった九州大学大学院人間環境学研究院野島一彦教授、針塚進教授に感謝いたします。

文 献

- 橋本 剛 (1997) : 現代青年の対人関係についての探索的研究—女子学生の面接データから. 名古屋大学教育学部紀要, 44, 207-219.
- 橋本 剛 (2000) : 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 岩間夏樹 (1995) : 戦後若者文化の光芒—団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡. 日本経済新聞社.
- 岸 良範 (1989) : 大学生の対人関係. 山崎久美子編, 現代のエスプリ266 大学生のメンタルヘルス. 至文堂, 94-102.
- 小塩真司 (1998) : 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・和田 実・後藤宗理・浅野敬子・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎・鄭曉齊 (1987) : 現代青年の社会意識に関する研究. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 34, 25-39.
- 松井 豊 (1990) : 友人関係の機能. 齋藤耕二・菊池章夫編, 社会化のハンドブック. 川島書店, 283-296.
- 長沼恭子・落合良行 (1998) : 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係. 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 中園尚武 (2000) : 現代青年の友人とのつきあい方とソーシャルサポートについての一研究. 九州大学心理臨床研究, 19, 79-86.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) : 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 (1993) : 現代青年の友人関係に関する考察. 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 (1995) : 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 大平 健 (1995) : やさしさの精神病理. 岩波出版.
- 斉藤和志・中村雅彦 (1987) : 対人的志向性尺度作成の試み. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 34, 97-109.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994) : 青年期の交友関係における同調と心理的距離. 教育心理学研究, 42, 21-28.